

丁寧な熱心な作業も技術の一つです！！

臭気ファンより排気せずは、臭気横引き配管の溜水でした！



月1回の定期点検時に、駐車通路にあるDSP処理槽のスラブ周辺に少し臭気が漂いました。

屋上の臭気ファンは稼働していますが、排気は全くしてないことが原因でした。



堅管よりの溜水、引抜き全景です。



屋上への臭気堅管に穴を開けました。そこで屋上の排気を確認できました。

堅管から処理槽までの間での水溜閉塞と確定し、自給式ポンプで溜水を引抜きすることとしました。



濁り水でなく清水を排水しました。

排出は概ね80Lと推定します。

埋設配管は、結露水が溜まる構造となっているようです。



左の写真は、今回使用の自給式ポンプです。

吸い込み配管材は、電気配管用CD管を使用し、20m先まで延長しました。

溜水は、清水であり結露水と推察できました。



溜水排水後、屋上臭気ファンからの排気を確認しました。

処理槽周辺に漂っていた臭気は、完全に消えました。

処理槽内の臭気も極めて弱いのですが、堆積すれば周辺に臭いは籠ります。

定期的な溜水の引き抜きが必要と判断します。

水物語 No66

「朝かほに 釣瓶とられて もらい水」(加賀の千代女)



石川県白山市 千代女あさがおまつり (4千鉢)

千代女は1714年12歳の頃、岸屋弥左衛門に弟子入りし、俳諧の手ほどきを受けたとされています。

17歳の時、松尾芭蕉の門下の一人各務支考の訪問を受け、支考の面前で「ゆくはるの 尾やそのままに かきつばた」「稲妻の 裾をぬらすや、水の上」の2句を読み上げ、「あたまからふしぎ名人」と讃えられて全国に名が知れ渡りました。

千代女の歴史的逸話として、ある日のこと加賀のお殿様が女流俳人として名高い千代女の噂を耳にして、金沢城に召し出させた時のことです。お殿様のお出ましがあり、御殿の大広間で平伏していた千代女が、面を上げたところ、「加賀の千代女とやら、何にたとえよう、「鬼瓦」とおっしゃったので、千代女はすかさず「鬼瓦 天守閣をも 下に見る」とやり返したそうです。(地元・金沢ではガイドトークです)

そこで、お殿様は俳人としての才能を確かめようとして、「一句の中に四角と三角と丸を詠み込んでみよ」と難題をお出しになったところ、千代女は一呼吸おいて、「蚊帳の中(□) ひと角外して(△) 月を見る(○)」と詠み上げ、お殿様は千代女の得意即妙な受け答えに感嘆の声を上げたそうです。千代女は、生涯1700種の俳句を詠み、辞世の句は「月も見て 我はこの世を かくし哉」で、73才の生涯を終えました。

汚泥ゼロ・臭気ゼロ！

DSPハイブリッドシステム推進中！

株式会社クリーンテックサービス東京